

●今日の箇所イエス様は「互いに平和に過ごしなさい」そのために「自分自身の内に塩を持ちなさい」と言われました。この言葉の意味を共に味わいたと思います。

ある時、誰が一番偉いかという議論をしていた弟子達に対してイエス様は「私を信じるこれらの小さな者の一人を躓かせる者は…海に投げ込まれるほうがよい」と厳しい言葉を述べられました。偉さや正しさを主張する時に、人は往々にして弱者をさげすみ、軽んじてしまう、その事への警告の言葉です。

●そして更に厳しい言葉が続きます。「片方の手があなたをつまづかせるなら、切り捨ててしまいなさい。両手がそろったまま地獄の消えない火の中に落ちるよりは、片手になっても命にあずかる方がよい。」ここでイエス様は何度か同じような教えを繰り返す中で、「命に預かる」という言葉を、後に「神の国に入る」と言い換えています。つまり今日の箇所イエス様は「神の国」と「地獄」について話しておられるのですが、これは死後の世界としての天国や地獄を言っているのではないのです。

●禅の白隠和尚の話をお話しします。一人の侍が白隠和尚に地獄と極楽のありかを尋ねました。すると白隠は「その年でまだ地獄の有無がわからぬのか、この腰抜け侍！」と罵りました。その言葉に侍は怒り、刀を抜いて白隠を追いかけて、まさに殺そうとしたその時、白隠は大声で叫んで、「そこが地獄だ！」と言いました。白隠のその一喝に、侍は地獄とは、自分こそが正しいとして怒りに燃える自らの内側にあることを思い知ったのです。そして、この侍は顔を赤らめ深々と頭を下げました。すると和尚は穏やかに彼を指し「それ、そこが極楽よ。」と言いました。侍は、天国は地獄を経験して初めて観ることの出来る世界であることを知りました。

●今日の厳しいイエス様の言葉は、人間は皆、どこかに欠けをもった存在だということを告げています。そして「人は火で塩味をつけられる、自分自身の内に塩を持ちなさい」という言葉の意味は、私たち人間は、神と真剣に向き合う時、自らの罪深さや欠けを知らされるが、その裁きの火を通して初めて私たちはキリストの十字架による救いの喜び(神の国)に出会うのだという事を教えているのです。

●私たちは神の目から見たら「どんぐりの背比べ」です。しかしその欠け多き小さな存在を深く憐れみ、そのために命を捧げて愛を示してくださったイエス様がおられます。そのキリストの愛をこそ日々思い起こし、互いに平和に過ごす歩みへと導かれていきたい、と願います。